第十一部　イスラエルの贖いと回復

イザヤ 40 章～66 章

□第十一部のアウトライン

A)	プロローグ	40 章 1～11 節
B)	イスラエルの苦難は終わる	40 章 12 節～48 章
C)	イスラエルの罪は償われている	49 章～57 章
D)	イスラエルは二倍のものを受けている	58 章～66 章

イザヤ 40 章から 66 章までは、プロローグ（A）のあと、3 つの区分（B～D）が続く。第一番目の区分（B）では、預言の中心はバビロン捕囚からの解放者キュロスであった。二番目の区分（C）では、預言の中心はイスラエルを罪から解放するメシア「主のしもべ」である。そして、バビロンとの関係では、近い将来のバビロン捕囚ではなく、遠い将来の大患難期におけるバビロンからの最終的解放に目が向けられる。

□「C）イスラエルの罪は償われている」のアウトライン（イザヤ 49 章～57 章）

1. 主のしもべの使命（49 章）
2. 主のしもべの苦難（50 章）
3. 目覚めよ、目覚めよ（51 章～52 章 12 節）
4. 主のしもべの死と葬りと復活（52 章 13 節～53 章）
5. 「ヤハウェの妻」（＝イスラエル民族）の回復（54 章）
6. イスラエルと異邦人に向けて「救いを受けよ」（55 章～56 章 8 節）
7. 指導者層への宣告、信仰者たちへの神の憐れみ（56 章 9 節～57 章）

□「2. 主のしもべの苦難」のアウトライン（イザヤ 50 章）

a. 主とその妻（イスラエル民族）との別居状態（1～3 節）
b. 主のしもべ　その生い立ちと苦難（4～9 節）
c. 預言者イザヤから、信者と不信者へのメッセージ（10～11 節）

「主のしもべ」とは、メシアの呼称のひとつである。50 章では、主のしもべであるメシアの生い立ちと苦難が預言される。その預言に入る前に、1～3 節では、主とその妻であるイスラエル民族が、離婚の一歩手前、別居状態にあると警告される。

2. 主のしもべの苦難（イザヤ 50 章）

a. 主とその妻（イスラエル民族）との別居状態（1〜3 節）

イスラエル民族は、「ヤハウェの妻」と呼ばれる。
日本語の聖書では、「ヤハウェ」は太い活字の「**主**」と訳されている。一般的な主人を意味する「主」は、太い活字ではない。
イザヤ 50 章の解説に入る前に、旧約聖書の中で、主とその妻（イスラエル民族）が、どういう関係にあるのかを簡単にまとめて、次の（1）とする。

(1) 主とイスラエル民族との関係は、6 つの段階を経る

① 荒野の旅 40 年目、ヨルダン川の東側にて、**婚姻**関係に入る誓約をした（申命記 5：1〜3、6：10〜15、7：6〜11、エゼキエル 16：8）
- この婚姻関係の基盤となったのは、荒野の旅 1 年目にシナイ山で主がイスラエルに与えた契約、すなわちモーセの律法である。シナイ山は、別名をホレブ（「乾燥した場所」の意味）とも呼ぶので、モーセの律法は、「シナイ契約」や「ホレブ契約」とも呼ばれる。

② イスラエルが**霊的姦淫**を犯す（エレミヤ 3：1〜5、20、31：32、エゼキエル 16：15〜34、ホセア 2：2〜5）

③ 預言者イザヤの時代には、**別居状態**（イザヤ 50：1）

④ 約 100 年の別居状態のあと、**離婚**。離婚状は、エレミヤ 3：6〜10。

⑤ バビロン捕囚、そして世界離散。主がイスラエルを**処罰**する（エゼキエル 16：35〜43、58〜59、ホセア 2：6〜13）。申命記で警告されていた「のろい」のとおり。現代に至るまで、イスラエルはこの 5 番目の段階にある。

⑥ **再婚**し、イスラエルへの祝福が回復される。もちろん、そのためには改めて新しい婚姻契約が必要である。それが、エレミヤの「**新しい契約**」である（エレミヤ 31：31〜34、エゼキエル 16：60〜63、イザヤ 54：1〜8、62：4〜5、ホセア 2：14〜23）
- イザヤ 54：1〜8・・・その内容は、第 6 段階に関する預言。C－5 にて扱う。

(2)　預言者イザヤの時代は、別居状態である（イザヤ 50：1～3）

50：1　**主はこう言われる。「わたしがあなたがたの母を追い出したという離縁状はどこにあるのか。わたしがあなたがたを売ったという、わたしの債権者とはだれなのか。見よ。あなたがたは自分たちの咎のために売られ、自分たちの背きのために、母は追い出されたのだ。**

- **離縁状はどこにあるのか・・・**どこにもない。まだ主はイスラエルに離縁状は出していない。
- **自分たちの背きのために、母は追い出された・・・**主が離縁して追い出したわけではなく、自分たちの背きのために別居状態にある。

50：2～3　**なぜ、わたしが来たとき　だれもいなかったのか。わたしが呼んだのに、だれも答えなかったのか。わたしの手が短くて贖うことができないのか。わたしには救い出す力がないというのか。**
見よ。わたしは叱って海を干上がらせ、多くの川を荒野とする。その魚は水がなくて臭くなり、渇きのために死に絶える。わたしは天を闇でおおい、粗布をその覆いとする。」

- **だれもいなかった、だれも答えなかった・・・**主がイスラエルに声をかけても、だれもいないし、だれも答えない。彼らは偶像のところに行っていたからである。偶像は罪を贖うことも、人を救うこともできないのに、である。
- **海を干上がらせ・・・**出エジプトのときに、主が紅海を分けてイスラエルを通過させた出来事を指す。

b.　主のしもべ　その生い立ちと苦難（4～9 節）

(1) イエスは 12 歳のときには、ラビたちを驚かせるほどの聖書理解を持っていた（ルカ 2：41～52)。それはどのようにして学んだのか。

50：4　**神である主は、私に弟子の舌を与え、・・**（中略）**・・朝ごとに私を呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、私が弟子として聞くようにされる。**

ルカ 2：40～47　**幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがその上にあった。さて、イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた。イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った。そして祭りの期間を過ごしてから帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかずに、イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを進んだ。後になって親族や知人の中を捜し回ったが、見つからなかったので、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。そして三日後になって、イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。**

(2) イエスは疲れ果てていた人々に一言で励まし力を与えるメッセージをすることができた（マタイ 11：28～30)。それはどうやって訓練されたのか

50：4　神である主は、私に弟子の舌を与え、**疲れた者をことばで励ますことを教え**、朝ごとに私を呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、私が弟子として聞くようにされる。

マタイ 11：28～30　**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。**

(3) イエスは指導者層から拒絶されても驚きもせず、裁判でも十字架刑でも一切抗弁せず、不満を口にすることもなかった。イエスはどのように心構えしたのか。

50：5　**神である主は私の耳を開いてくださった。私は逆らわず、うしろに退き**

もせず、

(4) イエスは打たれ侮辱され、唾をかけられたとき、それを避けようともせず、顔を隠すこともしなかった。

50：6　打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。

(5) イエスは、なぜそのような侮辱に耐えることができたのか。イエスの心の内は、どのようなものであったのか。

50：7～9　しかし、神である主は私を助けてくださる。それゆえ、私は侮辱されることがない。それゆえ、私は顔を火打石のようにして　自分が恥を見ないことを知っている。
私を義とする方が近くにいてくださる。だれが私と争うのか。さあ、ともに立とう。だれが私をさばく者となるのか。私のところに出て来るがよい。
見よ。神である主が私を助けてくださる。だれが私を不義に定めるのか。
見よ。彼らはみな衣のように古び、シミが彼らを食い尽くす。

- **私を義とする方**・・・父なる神を指す。父なる神はメシアを義とする。

(6) 父なる神がメシアを義とするとは、どういう意味か？　イエスは、神の子であり、罪なきお方であるから、元々、義人ではないのか？
父なる神がメシアを義とするとは・・・
⇒それは、【イエスを神の子として公に示すこと】
⇒その手段は、【イエスを死者の中から復活させること】

ロマ１：2～4　**――この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によれば、ダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。**

c.　預言者イザヤから、信者と不信者へのメッセージ（10～11 節）

直前の 4～9 節の「私」は、主のしもべ、メシアである。よって、4～9 節はメシアが語っておられる。
それに対し、ここからの 10～11 節は、50 章の預言の結びのことばであり、預言者イザヤが語っている。この点に注意して読もう。

(1)　信者へのメッセージ（10 節）

50：10　**あなたがたのうちで主を恐れ、主のしもべの声に聞き従うのはだれか。闇の中を歩くのに光を持たない人は、主の御名に信頼し、自分の神に拠り頼め。**

(2)　不信者へのメッセージ（11 節）

50：11　**見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火の明かりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。このことは、わたしの手によって　あなたがたに起こり、あなたがたは苦悶の場所で伏し倒れる。**

- **火をともし、燃えさしを身に帯びている・・・**燃えさしを身に帯びていながら、火をともして手に持つなら、その火は自分の身に帯びた燃えさしに容易に燃え移り、自分の身を燃やしてしまう。
- **自分たちの火の明かり・・・**この火は、不信者が犯す罪である。不信者は自分たちの罪がどれほど重いかをわきまえず、ごく小さな火花のようなものとしか、考えていない。しかし、その火花は神の怒りに点火して、神のさばきを受けることとなる。結局は自分で自分を滅ぼすことになる。
- **このことは、わたしの手によって　あなたがたに起こり・・・**日本語の聖書では「わたし」と表記して、神の手によってこのことが起こるという解釈のもとに、翻訳されている。しかし、10～11 節は預言者イザヤが語っている。よって、神の手の中ではなく、預言者イザヤの手の中にあって、このことが起こる。「このこと」とは、自分で自分を滅ぼすことである。イザヤの手の中にあるとは、神から受けた預言を指す。不信者は、預言者の警告に従わない。
- **苦悶の場所で伏し倒れる・・・**よみの中の苦しみの場所を指す。いわゆる地獄である。不信者が死ぬと、その霊魂は地獄に行く。